

# 日本語母語話者の連文の予測能力の実態

石 黒 圭

【キーワード】 母語話者 予測能力 一般性 複数性 創造性

## 【要旨】

本稿では、早稲田大学第一文学部を中心とした、日本語を母語とする学部生100名(2回目の調査では90名)を対象に、連文の予測の調査をおこなった。本調査は、読み手が予測能力を備えていることを前提に、どのように予測をおこなっているかを明らかにすることを目的とし、調査対象者に、ある当該文(とその先行文脈)を示し、その後、その当該文とどのような関係にある、どのような内容の後続文が来るかを書かせるという方法を採用した。調査の結果、論者がこれまでの研究のなかで主張している、理由、句の説明、格成分の説明、結果、逆接、並立の六つからなる関係の予測の枠組が妥当性を備えているということに加え、①関係の予測には明らかな傾向が見られる(予測の一般性)、②関係の予測には複数の予測の併存が見られる(予測の複数性)、③内容の予測には創造性が見られる(予測の創造性)という3点があわせて明らかになった。

## 1 先行研究に見る予測能力の実態

日本語における読み手の予測能力を論じる研究は、近年急速に充実してきている。それは、予測研究の端緒となった寺村(1987)を継承する筑波大学における研究(堀口1989, 市川1993, 酒井1995)、お茶の水女子大学の研究グループの共同研究の成果(平田1991, 内田他1995, 大野他1996, 松浦1996, 瓜生1996,1997, 菊地他1996,1997, 石崎・坂田1997, 西條・渡邊1997, 齋藤他1997, 杉山他1997, 関1997, 津留崎他1997)によるところが大きい。これらの研究をとおして、母語話者は、語、句などの小さい単位から、文、段落などの大きい単位にいたるまで、さまざまなレベルで高い予測能力を備えていることが明らかになった。

しかし予測研究には、理解主体が予測能力を備えているかどうかという予測能力の有無にかんする面と、理解主体が予測能力を備えていることを前提に、どのように予測をおこなっているかという予測の方法にかんする面の二側面がある。前者にかんしては、上記の先行研究からわかるように、すでに十分な研究の蓄積があるが、後者にかんする研究は、体系的にはほとんどおこなわれていない。

論者は、すでに文を単位とした予測の方法の研究として、当該文<sup>\*1</sup>との関係から、予測される後続文を、理由(石黒1998a)、句の説明(石黒2001a)、格成分の説明(石黒2001b)、結果、逆接(石黒1998b)、並立(石黒1999)の六つに分け、体系的に考察した(石黒1996)。具体的には、連文の予測には、「どうして(理由)」「どうやって(句の説明)」「なにが(格成分の説明)」など、当該文全体または一部の要素に存在する情報の空隙を後続文で解消することを求める反問系の予測と、「それで(結果)」「しかし(逆接)」「それから(並列)」など、当該文の展開していく先の空隙を後続文で解消することを求める展開系の予測の二つの予測があり、この二つの予測を複雑に組み合わせながら、理解主体は文章を理解していると考えている。しかし、これらの研究はいずれも論者自身の内省に頼った研究であり、こうした予測の方法が多くの理解主体に共有されるものかどうかを確かめられないかぎり、恣意的であるとのそしりを免れない。そこで、このような分類を軸とした予測の考え方が果たして有効かどうか、高い予測能力を備えているとされる日本語の母語話者を対象に調査を実施した。

## 2 調査の方法

以下に述べる調査は、2001年6月1日、早稲田大学の第一文学部を中心とした学部生<sup>\*2</sup>100名<sup>\*3</sup>を対象におこなったものである。石黒(1996)などで用いた調査方法にしたがうとすれば、調査は、一つの作品の冒頭から結末まで1文1文丹念に予測するという方法をとる必要があるが、本稿の調査の目的は、100人という比較的大きな母集団を対象に、六つの予測の妥当性を見ることにあるので、実際の論文や小説から、適当と思われる部分を一部抜粋してきたものを用いた。

実際の質問シートは次のようなものである。

問 以下は実際の論文や小説から一部抜粋したものである。下線を引いたそれぞれの文において、その後、下線を引いた文とどのような関係にある、どのような内容の文が来るか、予測しなさい。

- (1) 経済学の「危機」や「混迷」をめぐる議論は、わが国の論壇において、ようやく下火となりはじめた。たしかに、論点はほとんど出つくした。

関係：

内容：

- (2) しかし全体的な自己崩壊のおそろしさは、責任をとるものがだれひとりとしていないままに、ゆったりと、もたれあいながら、退廃への道を歩んでいくところにある。かつて、日中戦争から太平洋戦争にはいるときもそうだった。

関係：

内容：

- (3) 塵捨場の隅から、急に白いものが飛び出し、一直線に庭を横切り、野菜畑の方に駆けてゆく。

関係：

内容：

(4) 眼の前には、浅田先生が立っていた。思わず、コペンということばが出そうになって、あわてて手を口にあてた。コペンは浅田先生のニック・ネームであった。

関係：

内容：

(5) 原子爆弾による傷害の治療方法は、なにぶんにも医学的に未知の分野であるため、まちまちであった。

関係：

内容：

(6) 三木清の獄死のニュースを聞いて、ロイター通信の記者がすぐに事情をしらべた。

関係：

内容：

調査にあたり、調査対象者（以下、対象者とする）に、予測にかんする予備知識は一切与えていない。したがって、関係の予測についても、対象者は、「理由」「句の説明」「格成分の説明」「結果」「逆接」「並立」などといった用語を知らずに調査に臨んでいる。そのため、「理由」の代わりに「原因」「由来」、「句の説明」の代わりに「状況」「例示」「補足」「具体化」「具体例」「解説」、「格成分の説明」の代わりに「名詞の内容」「詳細」「正体」、「結果」の代わりに「順接」「展開」「発展」「一般化」、「逆接」の代わりに「譲歩」「反対」「対比」、「並立」の代わりに「並列」「累加」「付加」「添加」など、さまざまな用語が見られた。しかし、それらは、上記6カテゴリーの下位カテゴリーか、六つの用語で表せる概念なので、本稿の用語に置き換えて集計した。

また、まれにはあるが、意味不明の用語や、そもそも関係についてなにも記入していないものもあったが、そうした場合はその後書いている内容から関係の見当をつけて上記6概念の中におさめた。なお、上記6概念におさまらないような用語や内容は（(4)の非連続の予測をのぞき）今回の調査では見られなかった。

なお、(1)から(6)までの調査の結果、六つの予測のうち、「並立」と「句の説明」にかんしては、原文と異なるタイプの予測に対象者の予測が集中した。そのため、この二つのカテゴリーにおいては、予測が成立しにくい可能性が存在するかもしれないと考え、後述するように、調査した翌週の6月8日にも、以下の2例について追加調査をおこなった。対象者は90名で、人数は若干減っているが、前回とほぼ同一の対象者であった。また、6月1日の調査と同様、調査段階では対象者に、予測にかんする予備知識は与えていない。

(7) 文部省の見解に反対しているのは、婦人団体や外務省だけではない。

関係：

内容：

(8) 学歴という点からみても、日本のエコノミストは、すこぶる多岐にわたっている。

関係：

内容：

### 3 調査の結果

(1) 経済学の「危機」や「混迷」をめぐる議論は、わが国の論壇において、ようやく下火となりはじめた。たしかに、論点はほとんど出つくした。にもかかわらず、いかにして危機をのりこえるかについて、目を見張るような方策は、いまのところ、まだ提案されていない。<sup>\*4</sup> (世 823 頁)<sup>\*5</sup> (逆接 87 名, 格成分の説明 8 名, 結果 5 名)

原文では、後続文は逆接となっており、実際逆接を予測した読み手が 87 名と、9 割近い読み手が後続文に逆接が来ることを見抜いている。「たしかに」というマーカーの存在が逆接の予測を容易にしているものと考えられる。また、内容の予測を見てみると「しかし、議論すべき問題は残っている。」や「しかし、まだ議論の余地はありそうだ。」<sup>\*6</sup> など、議論が完全には終わっておらず、まだ議論すべき点があるといった内容がその多くを占める。「ほとんど」というマーカーがそうした内容の予測に作用しているようである。

逆接を予測しなかった残りの 13 名の予測を見てみると、格成分の説明の予測が 8 名、結果が 5 名である。格成分の説明の予測は「たとえば、～という論点や～という論点などがあった。」といった論点の詳細を予測したものであり、結果の予測は「あとは、誰かが実行に移すのみである。」のように、論点が出つくした以上、次の段階に移行する必要があるという提案を予測したものであった。

(2) しかし全体的な自己崩壊のおそろしさは、責任をとるものがだれひとりとしていないままに、ゆったりと、もたれあいながら、退廃への道を歩んでいくところにある。かつて、日中戦争から太平洋戦争にはいるときもそうだった。そして方向は逆のようであったが、八・一五以後もそうだった。(世 778 頁) (句の説明 72 名, 結果 15 名, 並立 11 名, 理由 1 名, 未記入 1 名)

(2)の原文では、後続文は当該文と並立の関係にある。しかし、実際の読み手の予測では句の説明が 72 名と 70%以上を占めていた。読み手の側が「かつて、日中戦争から太平洋戦争にはいるときもそうだった。」という文に抽象性を感じ取っており、後続文にその詳しい説明を予測したためと考えられる。

しかし、この文を単に抽象性の高い文として考え、処理してしまうのは誤りであろう。第一文は一般論を述べた文であって、第二文、すなわち当該文はその一般論の例証と理解できるからである。実際の回答を見てみると、「日中戦争が始まり、日本政府は報道規制を積極的に行うようになる。」のように、この文をきっかけに当時の回想に入ると考えていた読み手が多い。いいかえると、一般論を表す第一文の具体的説明が第二文以降で展開され、第二文はその具体的説明の端緒になると予測されていたわけで、第二文は、新しい場面や話題を導入するために設定された文であると多くの読み手が理解したのである。事実、質問シートの内容欄に「日中戦争から太平洋戦争にかけての退廃への道の歩みを具体的に示す。」のような回答が目立っていた。第一文の「退廃への道を歩んでいく」ということばに影響を受け、後続文で退廃へのプロセスが具体的に描かれると感じたのだろうと考えられる。

次に多かった結果の予測も、この具体的説明の予測の延長線上にあると考えられる。「その結果として、日本軍による虐殺や沖縄本土決戦のような悲劇が起きたのである。」という回答に現れているように、退廃への道のりの行きつく先に数々の悲劇と敗戦があるからである。

原文にあるような並立の予測は10%強の読み手しか予測しなかった。論者自身は係助詞「も」が並立のマーカーとして機能すると予想していたのであるが、実際には、この「も」は列挙を示すものとしてではなく、具体的な一例を示すものとして受け取られたようで、多くの読み手は先行文から続く意味の流れを重視している。一方、この部分を並立の予測としてとらえた読み手のほとんどは原文と同じように時間の対立の中でとらえていた。ただし、そのとらえかたは、「そして現在の国政にも、そのような兆候が見られているように思う。」という回答にあるように、原文の「戦前」対「戦後」の対立ではなく、「戦前」対「現在」の対立が主流であった。

ちなみに、理由と予測した1名の回答は「なぜなら、その戦争は日本国民の意識そのものも退廃させ崩壊させてしまったからだ。」であった。

(3) 塵捨場の隅から、急に白いものが飛び出し、一直線に庭を横切り、野菜畑の方に駆けてゆく。多分、猫だろう。。(何244頁) (格成分の説明62名、結果18名、並立16名、句の説明4名)

(3)の予測でもっとも多かったのは原文と同じ格成分の説明であった。「白いもの」という正体不明の抽象的な存在が現れたということがまず読み手の注意を惹くからであろう。「飛び出し」「横切り」「駆けてゆく」ことから動物、それも、かなりのスピードで走ることができる動物であることはおおよその見当がつく。「塵捨場の隅」から現れることからさほど大きな動物ではなく、「庭」や「野菜畑」に現れることからかなり人々の生活に密着した動物であることもわかる。そうし

たことから、もっとも人気のある動物は、「見るとそれは、一匹の小さなうさぎであった。」に現れているようにウサギで、32例あった。以下、原文と同じネコが8例、イヌが4例、ネズミ（ハツカネズミ）が3例、イタチ、ホッキョクグマ（赤ん坊）が各1例であった。

結果は2種類に分かれる。一つは視点人物の心的反応であり、「私は驚き、思わず声をあげた。」のように驚きを表すものが多い。「急に」白いものが飛び出してきたからであろう。もう一つは視点人物の行動であり、「私はその白いものを追いかけて、野菜畑の方に走った。」のように白いものを追いかける行動が多い。「白いものが何であるか知りたくて、追いかけた。」のように視点人物の心的反応があわせて示されることもあり、「白いもの」の正体をつきとめたいという視点人物の気持ちは、格成分の説明の予測と共通するものがある。

並立の予測の多くは継起である。その後も視点人物によって白いものの観察が続けられ、その白いものがその後どのような行動をとったかを示すものである。「そして、その白いものは野菜畑の中に逃げ込んだ。」といったようなものがそれに当たる。「駆けていった」ではなく「駆けてゆく」という形を取っていることが、まだ続きがあるという感じを読みとったのであろう。

句の説明の予測はいずれも比喻の予測である。「それは、まるで風が吹くような一瞬のできごとであった。」のように、当該文の状況を比喻的にとらえなおすことを予測するのである。やはり「駆けてゆく」という基本形で終わる文末が、描写がまだ完全には終わっていないという感じを与えるため、同じ状況を別の角度からとらえなおして完結させる必要を感じるのであろう。

- (4) 眼の前には、浅田先生が立っていた。思わず、コペンということばが出そうになって、あわてて手を口にあてた。コペンは浅田先生のニック・ネームであった。頭がハゲていたので、コペンハーゲンをもじって、コペンのあだ名で呼んでいた。(何265頁) (理由64名、逆接17名、結果7名、句の説明5名、格成分の説明4名、非連続3名)

(4)も原文と同じ理由がもっとも多く、その理由も原文と同じニックネームの由来が多くを占めていた。原文のような、ハゲだからコペンハーゲンというものは見られなかったが、「浅田先生は若い頃、コペンハーゲンへ留学していたことがあった。そのため、授業中によくその頃の話をするので、こんなニックネームがついたのだ。」のように、コペンハーゲンにちなんだものが8例見られた。他には「コペンとはコッペパンの略で、私の友人が、浅田先生が日々コッペパンを主食として暮らしていることを面白がってこいつけたのである。」というコッペパンにちなんだものが3例、「なぜコペンかという、いつも小さなペンを胸ポケットにさして歩いていたからだ。」というペンにかんするものが2例、さらには、「先生の風貌はどことなく子ペンギンに似ていたからである。」や「浅田先生は昔「コ

ンペ」という言葉が言えなくて、「コペン」と言ってしまった。それ以来、彼のニックネームは「コペン」となった」などユニークなものが多かった。ただし、多くは内容のところに「ニックネームの由来を説明する。」と書く程度で、具体的なエピソードを挙げた読み手は少数であった。

次に多い逆接であるが、「しかし、それは先生には知られておらず、生徒の間だけのニックネームであった。」のように、そのニックネームの通用している範囲を限定しているもの、「しかし、先生はそのあだ名を嫌っていた。」や「しかし、先生に面と向かってそのニックネームを言えるはずもない。」のように、先行文の「思わず、コペンということばが出そうになって、あわてて手を口にあてた。」を承けて、コペンというあだ名を浅田先生が嫌っており、そのため、先生の前では使えないということを示すものがあった。

結果は、「そのため、私は普段、友人との間では、先生のことをそのあだ名で呼んでいた。」のように、コペンは先生のニックネームだから、そのニックネームを使っていたという趣旨のものが目立つ。

句の説明では「生徒たちはみな陰で先生をそう呼んでいた。」のように、背景説明をするものが、格成分の説明では「それは、今年の春に僕が名付けたものである。」のようにコペンというニックネームそのものを説明するものが見られた。

非連続というのは、石黒（1996）で述べたもので、理由、逆接などといった当該文と後続文の関係の質を問う以前の、関係の有無を問う予測で<sup>\*7</sup>、当該文で話題がいったん途切れ、後続文から新しい話題が始まるものである。転換と考えるもよい。「主人公と浅田先生が会話を始める。」のようなものがそれに当たる。先行文で描写文が続いているにもかかわらず、当該文で説明文がはさまれたので、その説明文が描写文の連続を止めていると認識されたためであろう。

(5) 原子爆弾による傷害の治療方法は、なにぶんにも医学的に未知の分野であるため、まちまちであった。和夫のように毎日消毒し、リバノール水湿布をしてもらうのは上等のほうであった。チンクオイルがないので、その基礎材料であるオリーブ油とか菜種油とか大豆油とか椿油とかを塗っているだけの者もいた。赤チン、マーキュロを塗りたくっている者もいた。（何305頁）（結果57名、句の説明25名、逆接15名、理由3名）

「いろいろ」「さまざま」「まちまち」といった種類が多いということを示す語句は一般に「たとえば」という反問を生みやすい（石黒2001a）。その指摘自体は間違っていないと思うが、この調査結果で見ると、多少の補足が必要になりそうである。

(5)の予測でもっとも多かった予測は、原文のような例の列挙を予測する句の説明の予測ではなく、結果の予測であった。句の説明を予測した読み手も25名と少ない数ではないが、結果の予測をした読み手はその倍以上存在する。結果の予

測をした読み手の内容の予測を見ると、「そのため、多くの被爆者は、現在から見ると不適切な治療を受けて、亡くなっていった。」のようなものが目立つ。つまり、「まちまち」には人によって方法が異なるのは問題であるという否定的な含意があるのである。「いろいろ」や「さまざま」であれば種類が多いことは問題ではない。むしろ肯定的に評価されることも多い。しかし、「まちまち」の場合、種類が多いことは決してすばらしいことではない。その意味で、「まちまち」は「むら」や「ばらつき」といったことばに似て、そろっていないことが否定的な評価を受けるのであり、その否定的な評価が望ましくない結果を誘発することになるのである。

そうした含意は句の説明の予測のときも感じられる。原文でも治療方法の決定版がわからないため、手探りで治療方法を試している様子が読みとれる。読み手の予測でも、「ただ冷やすだけの医者もいれば、小麦粉を水でといたものを塗布するとよいとするものもあった。」のように効果的な治療法を施しているようには思われない。治療法の列挙を予測するにしても、「まちまち」の場合、その治療が効果的かどうかわからない治療法の列挙になることを知っておく必要がある。

逆接の予測が成立するのも、「まちまち」のそうした否定的なニュアンスをおさえるとよくわかる。逆接の予測の場合、「近年になって原子爆弾による傷害の有効な治療方法が発見された。」のように、当該文で否定的だった含意が後続文で肯定的な含意に転化するところにその特徴がある。

理由の予測の場合、「なぜなら、それまで原子爆弾による被害者はいなかったからである。」のように、「まちまち」にならざるをえなかった理由が示される。

- (6) 三木清の獄死のニュースを聞いて、ロイター通信の記者がすぐに事情をしらべた。そして、政治犯のすべてがまだ獄中にいるということを知った。  
(世764頁) (結果71名、理由16名、逆接10名、並立2名、格成分の説明1名)

「しらべる」は「探す」「検索する」などととも認識を目的とした動詞である。したがって、原文にある通り、後続文には調べた結果わかったことが描かれることになる。事実、「すると、意外な事実が明らかになった。」のように、調べた結果を予測した読み手が71%で7割強を占め、もっとも多かった。

次に多かった理由の予測は、「しらべる」という行為の動機を予測するものである。ある意図を持っておこなう行為はその意図がはっきりしないと、不全感が残ることが多い(石黒1998a)。この場合、なぜ三木清の死をわざわざロイター通信の記者が調べたのか、その意図を示す必要がある。そのため、「突然の死で、そのことに不信を持ったからだ。」のような予測がなされたものと考えられる。

逆接の予測は結果の予測と表裏の関係にある。結果の予測では後続文に調べた結果わかった内容を予測するが、逆接の予測では「だが、なにも分からなかつ



た。」のように、調べてもわからなかったということを予測するのである。

並立の予測はこの場合、時間的な色彩を帯びた継起の予測であって、「そして彼はそれを記事にした。」のように調べた結果わかったことを問題にしている。結果の予測をさらに一步前に進めた予測である。

1名だけあった格成分の説明の予測は、「ライター通信の記者の名は～といい、彼は十数年来、三木の活動を追い続け、すでに四つのルポを書いていた。」というもので、「ライター通信の記者」を詳しく説明する予測である。ただし描かれている内容は、理由の予測における「しらべる」という行為の動機になっている。

以上、(1)で「逆接の予測」、(2)で「並立の予測」、(3)で「格成分の予測」、(4)で「理由の予測」、(5)で「句の説明の予測」、(6)で「結果の予測」が実際に成立するかどうか、100名の対象者に調査をおこなった。その結果、(1)の「逆接の予測」、(3)の「格成分の予測」、(4)の「理由の予測」、(6)の「結果の予測」の四つについては、多いもので80%以上、少ないものでも60%台は、原文の通り、予測が成立していた。これらについてはおおむね当該の関係の予測が成立していたと判断してよいと考えられる。しかし、(2)の「並立の予測」、(5)の「句の説明の予測」については、前者が11%、後者が25%と、当該の関係の予測が成立していたとは到底言いがたいものがある。「並立の予測」と「句の説明の予測」では、関係の予測が成立しにくいのだろうか。そう考えて、先に述べたような二度目の調査をおこなった。調査対象者は前回よりも若干減って90名であるが、それ以外の調査の条件は前回とほぼ同等である。結論から述べると、この二つの予測で、関係の予測が成立しにくいということはとくにないように思われる。

(7) 文部省の見解に反対しているのは、婦人団体や外務省だけではない。日本弁護士連合会も昨年二月に「高等学校家庭科の女子のみ必修についての意見書」を発表している。(世909頁) (並立85名、逆接2名、理由2名、結果1名)

「だけではない」という累加を表す明確なマーカーがある上に、「のは」で表される分裂文を使って「だけではない」の部分が焦点化されているためか、きわめて高い確率で並立の関係を予測している。「厚生省や教育委員会、その他さまざまな団体が反対の意向を示している。」に現れているように、省庁や教育関係の予測が多かった。

逆接の予測は、当該文の「婦人団体や外務省だけではない。」という部分を反対している団体が多いという意味でとらえ、「にもかかわらず、文部省の対応は鈍い。」と一步議論を進めたものである。理由の予測も、「婦人団体や外務省だけではない。」を反対が多いととらえ、そんなにも反対が多い理由として、「なぜなら、今回の事件は様々な問題が絡み合っているからだ。」のように理由を提示してい

る。結果の予測もまた、反対する団体が多いために、「だから問題解決になかなか結びつかない。」と事態が先に進まないものとしてとらえている。

この(7)の予測では、「だけではない」に不全感を感じるかどうかが予測の分かれ目で、大半の読み手はその不全感を並立の予測で埋めたが、「だけではない」を反対者が多いという意味で考え、それに不全感を感じなかった一部の読み手だけが、逆接や理由、結果といった一歩進めた予測をおこなっている。このことは、予測には複数の可能性があるということを示していると同時に、その複数の可能性には出現の順序があるということもあわせて示している。

(8) 学歴という点からみても、日本のエコノミストは、すこぶる多岐にわたっている。法学部出身のエコノミストは多いし、理学部出身のエコノミストも少なくない。(世 815 頁) (句の具体的説明 74 名, 結果 8 名, 逆接 4 名, 並立 2 名, 未記入 2 名)

(5) で見た「まちまち」とは異なり、(8) の「多岐にわたっている」はとくに否定的な評価を与えるものではなく、種類が多いことをどちらかといえば肯定的に伝えている。そのためか、(5) と同じタイプの予測でありながら、読み手の予測と原文との一致率はかなり高くなっている。「学歴という点からみても」という表現があるせいか、内容の予測も「経済学部出身者はもとより、文学部出身者までいる。」のように原文にかなり近いものも散見された。

種類が多いことを肯定的に伝えているせいか、結果の予測は「したがって、様々な分野の意見が反映される。」のように多岐にわたっていることからくよい影響を予測させるものであり、逆接の予測は「しかし、それがよい結果をもたらすとは限らない。」のように、その肯定的な含意を反転させる予測になっている。

並立は「学歴という点からみても」の係助詞「も」の影響を受けた予測と考えられ、「学歴だけでなく、年齢や専門分野なども本当にばらばらだ。」のように展開される。なお、未記入者が 2 名いたが、「多岐にわたる」という表現が比較的難しいものだったため、予測が困難だったのかもしれない。

#### 4 調査のまとめ

石黒 (1996) で示した理由、句の説明、格成分の説明、結果、逆接、並立の六つからなる関係の予測の枠組が妥当性を備えているかどうかは、一連の拙稿のすべての用例について、本稿のような調査を実施し、検証しなければ明らかにならないことであるが、少なくともそれぞれの典型例においては、そうした六つの枠組みに収まることがわかった。また、(1) から (8) までの調査結果を一般化すると、以下の三点に集約される。

### ①関係の予測には明らかな傾向が見られる（予測の一般性）

上記の結果から、関係の予測には明らかな傾向が見られる。明快な判断がしやすくとされる文法性判断ですら、母語話者を対象に実際の調査をおこなうと、その判断に少なからぬゆれが見られることを鑑みると、本調査では、理解主体には予測に関わる理解文法があると言えるほどの偏りが見られる。

### ②関係の予測には複数の予測の併存が見られる（予測の複数性）

一方、どのような予測でも、すべての人が同じ予測になることは考えにくい。たとえ少数の理解主体しか支持しない予測であっても、個々の調査結果を見ると、驚くほどつじつまがあった予測をしている。そのことは、用例によっては複数の予測が成り立ちうるものが存在し、理解主体はそのような複数の予測を考慮しながら理解している可能性があることを示唆している。

### ③内容の予測には創造性が見られる（予測の創造性）

関係の予測にはある程度の一般性が見られる一方、内容の予測には理解主体の個性が明確に現れている。たとえば、(3)の白いものの正体は「ウサギ」「ネコ」「イヌ」「ネズミ」から「イタチ」「ホッキョクグマ」まで見られた。一方、(4)の浅田先生のあだなコペンの由来は「コペンハーゲン」から「コッペパン」「小ペン」「小ペンギン」「コンペ」まで見られた。<sup>\*8</sup> このように、ある関係の予測の枠内でも、その内容面で理解主体の創造性が存分に発揮されていることがわかる。

以上三点から、母語話者の連文における予測能力は、関係の予測のレベルでは、母語話者の個性によらない一般性が発揮されており、その一般性の幅は複数の予測の候補が併存するという程度にとどまるのにたいし、内容の予測のレベルでは、創造性とでも呼ぶべき母語話者の個性が存分に発揮されていることがわかる。

- 
- ※1 読み手が今読んで理解している文を当該文、この当該文の前にある、読み手がすでに読んだ文を先行文、当該文の後にある、読み手がこれから読む文を後続文とする。
  - ※2 早稲大学第一文学部のオープン科目「日本語をみがくIB」の受講者が対象者である。学部の1～2年生を対象にした授業であり、実際、70%程度が1～2年生である。第一文学部の授業ではあるが、オープン科目という授業の性格上、約4分の1は他学部（政経学部、法学部、第二文学部、教育学部、商学部、理工学部、社会科学部、人間科学部）や他大学（学習院大学、学習院女子大学、武蔵野美術大学、上智大学）の学生である。
  - ※3 クラスには11名の留学生がおり、実際の対象者は111名にのぼるが、今回の調査では対象者を母語話者にしぼったため、留学生の調査結果は数には加えていない。
  - ※4 当該文には実線の下線、後続文には破線の下線を引くようにした。
  - ※5 「世」は『世界』主要論文選編集委員会編（1995）『『世界』主要論文選』岩波書店、

「何」は大江健三郎編(1983)『何とも知れない未来に』集英社文庫からの引用を示している。

- ※6 以下、「」に入れて示す内容の予測は、調査に基づく実例である。
- ※7 石黒(1996)では、予測のレベルを、当該文と後続文が連続しているかどうかを問う連続の予測、連続していることを前提に当該文と後続文の関係の質を問う関係の予測、関係が決まっていることを前提に後続文の具体的内容を問う内容の予測の三段階に分けて考察している。実際の理解の助けとなり、記述して意味があるのは、多くの場合、本稿で、理由、句の説明、格成分の説明、結果、逆接、並立と区分した関係の予測である。
- ※8 前章、(3)と(4)の説明を参照のこと。ただ、ある程度の時間を与えて、調査シートに記入をさせたため、「ウサギ」や「ネコ」、「コペンハーゲン」や「コッペパン」という、瞬時に思い浮かべられるものだけでなく、「イタチ」や「ホッキョクグマ」のようにひねったものや、「浅田先生は若い頃、コペンハーゲンへ留学していたことがあった。そのため、授業中によくその頃の話をするので、こんなニックネームがついたのだ」や「コペンとはコッペパンの略で、私の友人が、浅田先生が日々コッペパンを主食として暮らしていることを面白がってこうつけたのである」といった、瞬時には思い浮かべられそうもない逸話まで現れた。そこまでいくと、理解行為というよりも、理解行為にヒントを得た表現行為になってしまっている。しかし、そのことを差し引いて考えても、文化的傾向として「ウサギ」や「コペンハーゲン」に予測が偏る一方で、まず初めに思い浮かべるものが読み手によってこれだけの違いがあるということは興味深い事実であると思われる。

#### 【参考文献】

- 石黒圭(1996)「予測の読み－連文論への一試論－」『表現研究』64
- (1998a)「理由の予測－予測の読みの一側面－」『日本語教育』96
- (1998b)「逆接の予測－予測の読みの一側面－」『早稲田日本語研究』6
- (1999)「並立の予測－予測の読みの一側面－」『国語学研究与資料』23 国語学研究与資料の会(早稲田大学)
- (2001a)「句の説明の予測－予測の読みの一側面－」『一橋論叢』126-3 一橋大学一橋学会
- (2001b)「格成分の説明の予測－予測の読みの一側面－」『一橋大学留学生センター紀要』4
- 石崎晶子・坂田睦深(1997)「ニュース文聴解における日本語母語話者と学習者の予測能力－接続助詞「が」との関わりから－」平田編(1997)所収
- 市川保子(1993)「外国人日本語学習者の予測の能力と文法的知識」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』8
- 内田安伊子、池上摩希子、大野早苗、大島弥生、長友和彦(1995)「予測文法研究(1): 「が」と「は」の予測機能について」『言語文化と日本語教育』9 お茶の水女子大学言語文化学会
- 瓜生佳代(1996)「談話の展開と予測能力について－確認要求表現を用いた発話を中心に

- (1) 『言語文化と日本語教育』12 お茶の水女子大学言語文化学会  
 —— (1997) 「談話の展開と予測能力について- 確認要求表現を用いた発話を中心に  
 - (2) 平田編 (1997) 所収
- 大野早苗・堀和佳子・八若寿美子・池上摩希子・内田安伊子・郭末任・許夏珮・長友和彦 (1996) 「予測文法研究- 後続文完成課題から見た日本語母語話者と日本語学習者の予測能力について-」 『日本語教育』91
- 菊地民子, 天野千春, 猪狩美保, 嶽肩志江, 大島弥生, 長友和彦 (1996) 「予測文法研究- モダリティ表現の予測能力とその習得について-」 『言語文化と日本語教育』11 お茶の水女子大学言語文化学会
- 菊地民子, 猪狩美保, 嶽肩志江 (1997) 「日本語モダリティ表現の予測能力とその習得に関する研究」 『第二言語習得と日本語研究』創刊号第二言語習得研究会
- 西條美紀・渡邊亜子 (1997) 「日本語ニュースにおける予測方略- 日本語母語話者の場合-」 平田編 (1997) 所収
- 齋藤ひろみ・池田玲子・近藤彩・鶴見千津子・渡辺由美 (1997) 「物語文の読解及び予測過程におけるスキーマの利用- 母語話者と上級日本語学習者の読解過程のプロトコル分析を通して-」 平田編 (1997) 所収
- 酒井たか子 (1995) 「文の適切性判断のための一試案- 後続文完成問題における日本人との比較-」 『筑波大学留学生センター日本語教育論集』10
- 杉山ますよ・田代ひとみ・西由美子 (1997) 「読解における日本語母語話者・日本語学習者の予測能力」 『日本語教育』92
- 関麻由美 (1997) 「ニュースの聞き取りにおける日本人と留学生の予測能力- 連体修飾節との関わりから-」 平田編 (1997) 所収
- 津留崎由紀子・中嶋敦子・金志宣・近藤彩・齋美智子・広田妙子 (1997) 「「が」と「は」の予測機能について- 予測能力における日本語学習者と日本語母語話者の比較-」 平田編 (1997) 所収
- 寺村秀夫 (1987) 「聞き取りにおける予測能力と文法的知識」 『日本語学』6-3
- 平田悦朗 (1991) 「ニュース文の構造と聴解の予測能力について」 『お茶の水女子大学人文科学紀要』44
- 平田悦朗編 (1997) 『日本語学習者の文の予測能力に関する研究及び読解力・聴解力向上のための教材開発』平成8年度文部省科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 研究成果報告書 (課題番号 06451159)
- 堀口純子 (1989) 「コミュニケーションにおける聞き手による予測の型」 『文藝言語研究言語篇』7 筑波大学
- 松浦恵津子 (1996) 「ニュース文聴解における予測能力- テ形接続を中心とした日本語母語話者と日本語学習者との比較-」 『言語文化と日本語教育』12 お茶の水女子大学言語文化学会